John Brightと1840年代初期の不況

金　子　俊　夫

目　次

はじめに
1．John Brightと1841年の不況
2．1842年 Rochdale の労働者に対する演説
3．「栓抜き暴動 (Plug Plot)」について
おわりに

はじめに

イギリスにおける1838年の夏より1842年の夏に至る4年間は大不況の時期であった。この不況は農業における不振による穀物価格の高騰が出発点であった。すなわち，1838年の7月末に近づくと小麦の全面的な収穫不足が支配的状況となり，クォーターあたりの週平均小麦価格を1か月の間に68シリング2ペンスから77シリングへと10シリング近く上昇させたのであった[1]。またその不十分な国内在庫が明らかになり食料品価格を高騰させるに至り，綿織物製造業の産業資本家は彼らの労働者に対し生活を守るに必要な，より一層の高賃金を確保せざるをえなくなり，そのためには現在の穀物法が大きな障害となっていったのである。くわえてこの穀物法が原因となり欧米諸国，特にアメリカの産業資本がイギリスの海外市場を著しく浸食し始めたため，さらに不況は製造業全般に拡大し，高賃金はおろか，労働賃金の引き下げ，雇用の減退をまねき，労働者階級は二重の困窮に陥ったのであった。

このような状況の中でManchesterの綿織物製造業者は1838年9月に重商主義の遺物としての穀物法を廃止し，保護貿易から自由貿易への転換を図るために Manchester 反穀物法協会を設立し，翌年3月には各地の団体を統合

させ，反穀物法同盟に発展させたのであった。[2]。

しかし不況は弱まることを知らず，とくに1841年から42年は沈滞した景気により多くの消費者の需要は最低点にあり，頂点に達した。1841年の初めに入ると，1840年に綿織物製造業の原料である綿花の輸入量が1839年の約1.5倍[3]に達したことも手伝い，景気の回復が見られるのでは，という期待感が強まった。

しかしながら1841年の後半に入ると，今や一般的となった不況は予想を裏切って，ますますその度あいを強めていき，年末には，商業における逼迫は極限には達していなかったが，ほとんどすべての生産者層，とりわけ製造業地方の職工たちはかつてないほどの困窮を経験した。しかもいかなる改善の兆しも見いだすことのできなかった彼らの不満は翌1842年爆発するのであった。すなわち6月にイギリス中部地方で始まった労働者の騒動が8月に入るとその勢いを増し，Lancashire, Yorkshire, Cheshire の諸都市に広がっていったのである。とくに Manchester 周辺で始まった綿織物製造業労働者のストライキは深刻なものであった。その指導者は Chartists であり，いわゆる「栓抜き暴動」(「点火栓抜き暴動」ではなく）にまで発展したのであった。

Manchester の綿織物製造業者により組織された反穀物法同盟はこれに対処すべく同盟の指導者の1人である Rochdale の John Bright を派遣し，彼の演説によりこれを鎮圧したのである。

本稿において，1838年に始まり，1842年まで継続した不況の中で，特に最後の2年間における不況の状況のなかで，反穀物法同盟の活動を John Bright に焦点をあて，いかにこの危機を乗り切ったかを明らかにしたい[4]。

1．John Brightと1841年の不況

自由貿易運動における2人の偉大な指導者として Richard Cobden, John Bright をあげることに誰も依存はないであろう。しかし2人の名前は1838年9月「Manchester 反穀物法協会」設立時のメンバー表のなかにはなかった。Bright の名前は設立メンバー7名の1人である Archibald Prentice が編集長を務めている「Manchester Times」の10月13日付けに，最初の特別委員会(37名)の委員として報じられた[5]。彼は Manchester の居住者でない唯一のメンバーであった。さらに Cobden の名は1週間後に同委員会の追加委員31名の中に見いだすことができる。しかし彼らが協会の発足時からのメンバ

一でなかったとしても，彼らの活動はすでに活発化しており，その後も一貫して継続されるのである。Brightは成人にたっした1832年の選挙法改正運動より公的活動をスタートさせており，Cobdenも協会の発足以前から穀物法廃止運動を推進してきた[6]。

Manchester反穀物法協会は，講演会の開催，小冊子の発行，新聞への論文発表，議会請願などの方法により活動を活発化させていった。そしてCobdenは協会が結成されて以来，穀物法廃止運動の指導者としての頭角を現した。1838年12月，Manchester商業会議所の総会において講演を行い，「穏やかな態度で，論理的で，簡潔な演説を行い，親しみ深くかつ力強いものがある。[7]」と，好評を博したのである。Brightも翌1839年2月2日，反穀物法集会がRochdaleの屋外で開かれ，数千人の参加者を前にして，自由貿易問題に関する最初の演説を行った。「穀物法は国家の商業ならびに製造業を結果的に破滅させ，競争相手である外国製造業を発展させる。それはほとんど大部分の国民に有害かつ圧制的影響をもたらし，特に労働者階級は土地所有者による独占で悲痛なる損害をこおむっており，これは単に1つの政党の問題ではなく，全ての人々の問題である。これは食料品問題であり，たらふく食べられるかという問題であり，多数の労働者階級と貴族階級の問題である。[8]」と，優しいが説得力のある口調で語りかけ，更に，「Rochdaleのフランネル製造業の1/5がアメリカに輸出されていたが，穀物法により関税が課せられてからは，以前のように多くの織物を送ることができなくなった。[9]」と，実状を説明し，「工業の権利を守るのが政府の義務であり，穀物法廃止を要求することは労働者階級の利益を援助することである。[10]」と，演説を行い，協会内での地位を固めた。

そしてBrightは最初から同盟の活動に貢献した。しかし彼は，彼の公的活動の開始と，Cobdenとの友情の始まりを1841年の9月13日と言っている。BrightがCobdenに会ったのはこの日が初めてではない。彼らの面識は1838年に始まっている。教育問題に関するRochdaleでの集会に興味を持った若きBrightはManchesterのCobdenに講演を依頼したのである。Cobdenは同意し，出席した。そしてBrightの演説を彼は聞いて，賛辞を送り，行動を共にし，穀物法廃止を勝取るまで頑張らないか，との誘いをうけたことがあったのである。BrightはCobdenの再度の勧誘に感動したのであった。すなわち1841年にBrightは愛妻マーガレットと死別し悲嘆のどん底にあった

時，Cobden は Lemington に居る彼を弔問したのであった。Bright は悔やみの言葉で慰められた後，次のように Cobden に説得された。

「イングランドには，今こうしている間にも，妻が，母が，そして子供が飢えで死んでいる多くの家庭がある。あなたの悲しみが和らいだ時，私はあなたに私と行動を共にすることを勧めたい。そして我々は穀物法が廃止されるまで我々の運動を決してやめません[11]。」Bright は後に述懐している。

「私は彼の言った，多くの家庭，という表現が大げさでないことを知り彼の招聘を受けた。私は，誰かがやらねばならない仕事がある，ということを私の良心に感じた。その時から我々がした決意のために活動することをやめなかった。[12]」

この純朴な，博愛主義が彼の今後を成功に導いたのであり，この精神は彼の宗教的思考に影響されていると言える。

彼のおいたちを振返ってみる。

John Bright は1811年11月16日，Rochdale の Green Bank で生まれた。彼は紡績業を営む工場主である Jacob Bright の次男であった。父 Jacob は Derbyshire の紡績業者である William Holme の徒弟であった。そして1802年，Holme の 2 人の息子が Rochdale に移り，工場を建設，Jacob も同行し2人の息子に雇用された。そして彼の息子の John Bright が誕生する 2 年前に自分で工場を始め，独立し，やがて成功した。彼は事業において機敏で，厳格に対応した。しかし，公正で，哀れみ深い気質で，気前が良く，この厳しい時代において，他の紡績工場と比較して，労働者への対応は情け深い点で有名であった。彼は教会維持費に対し商品が差し押さえられるまで支払いを一貫して拒否するという頑強な抵抗により頭角を現し，社会革命運動の指導的地位を得た[13]。John Bright が持っている敬虔なる精神，曲げない意見，自由教義に基づく博愛主義は親譲りであろう。

彼の父，そして彼の祖先は数代にわたって非国教徒であり，クェーカ教徒の家柄であった。

この宗派は，山上の垂訓を文字どうり守って，絶対的戦争反対，兵役拒否という非戦主義を主張し，更に教会には洗礼も聖餐もなく，礼拝儀式の順序もない。教職者もおかない。各人が霊に感じて祈りかつ語る，という非常に簡素化された宗教である。また，奴隷解放，男女同権，国際協調による世界平和などの社会改革の面での活発な実践もこのフレンド派の特徴である[14]。

John Brightは彼が育てられた宗教的・政治的思想と伝統に対し忠実であった。

このようなクェーカー教の教義と，その教育を受けたJohn Brightの思想は反穀物法運動と共鳴するところが多い。

かくして，John Brightの活動が，Cobdenの激励を受けて再び活発化するのであるが，とりわけ目立つのは1842年であろう。

1841年のほとんどが個人的問題に心を奪われていたけれども，Brightは運動を全く忘れたわけではなかった。反穀物法同盟の「議会選挙を独立的に闘う」という方針のもとに，同盟の候補者支援のための選挙活動を展開していた。

彼はWalsall (Birminghamの北部) の補欠選挙では「同盟の方針を貫く」と主張して闘ったが，同盟の候補者であるJ. B. Smithは落選した。しかし8月の総選挙では上位当選を果たしたが，Brightには別の問題が生じた。Rochdaleにおいて同盟の候補者として北アイルランド人のSharman Crawfordの両氏を決定するためRochdaleの自由党を説得するのに大きな役割を演じた。彼はきめこまかい選挙区組織を作ることを奨励し，「同盟は単なるWhig党ではない」とアピールすることがTory党との闘いを可能にする，と主張し選挙運動に没頭した。そういう支持を得たCrawfordはやっとのことで選出された。BrightはCobdenに「我々は時代を動かすことを楽しみにし，明るい未来の到来を確信している」と，喜びを伝えた[15]。Cobdenもその時の選挙でStockportから当選し，自由貿易問題で議会の指導的役割を演じることとなった。

しかしながら1841年8月の総選挙は全体的に見るならば，同盟としては不本意であった。Melbourne自由党内閣が穀物法改正を含む関税引下げ政策を発表し，すなわち1828年のスライディング・スケール（Sliding Scale）を廃止し，8シリングの固定関税の導入，ならびに砂糖関税・木材関税を大幅に引下げるというもので，独占的傾向の強い商品に対する関税引下げを実施しようとしたのであるが，これに対し不信任案が出され自由党内閣は崩壊し，代ってRobert Peelひきいる保守党内閣が誕生したのであった。

同盟にとっては自由貿易という綱領のもとでは自由党の方が相入れるものがあったのである。

かくして総選挙は強力な保守党政府を作り，首相Peelは穀物法廃止の態度

は示さなかった。

1841年のこの時期の国の状態は悲しむべきものであった。その年の後半は一般の不況は衰えを見せるどころか，むしろ強まっていった。

集められたある統計によれば，Leeds において，20,936人以上の人々が週給11ペンス3/4ペニーであったことを物語っている。Paisley(Glasgow の東)の町では，全人口の1/4が飢餓の状態で，Manchesterのある地区では，1,029名の258家族が週1人当りわずか7ペンス半の平均収入である，という報告があり[16]，その他，多くの機械の遊休，多くの失業者数等が主要都市から報告されている。

1841年の終り近くに，この不況状況を調査するため，同盟は委員を任命した。12月16日に Manchester で製造業地区の不況を考察する集会が開かれ，Bright は，雇用不足と賃金下落によるフランネル製品に対する需要減退というさけることのできない影響を受け，ほとんどフランネル貿易が全滅している Rochdale の実情を報告するために参加した。

Bright は次のように説明している。

「我々は我々のまわりに広がっている不況を知っている。悲惨な状況は全ての貧しい人の家々で見つけられる。貧しい人々，と彼らを呼ぶことを私は恥ずかしかった。しかし現在それは全ての労働者に適用される言葉であった。貧困の出発点は労働者であると認識すべきである。厳しい貧困や極度の貧乏は労働者の家庭の一番のシンボルである。その結果不満が国中に充満している。このような状況下では君主も貴族社会も安全ではない。このような状態がこの国の美しい景観を破壊し，かつて最も力強かった国家をも破壊する。[17]」そしてこの集会は次のような決議を採択した。

一．Manchester を中心とする地域は綿貿易とそれに関連する多くの分野に従事しているが，全般的に不況に見舞われており，その継続期間は Lancashire の歴史に於て，いまだかって比較するものがないほどの長さである。

一．雇用主と職工を取りまく人口状態は大いに悪化していることは，この集会以前から明らかである。

一．建物，機械などの固定資本は1835年以来，1／2近く価値を下げている。

一．資本家の投資収益が長期間停止している。

一．破産と負債の返済不能は驚異的に増大している。

一．商店主は多大な損害をこうむっている。

一．労働賃金は全般的に下落している。

一．数多くの熟練工や援助を必要としている職工は，完全に又は部分的に失業している。

一．貧困，病気，犯罪，死亡率が一層貧しい階級に侵入している。

一．Lancashireの多くの町から集まった代表者の意見では，これら全ての弊害は現在その厳しさが軽減されることなく存在している。

一．この社会的大不況を改善する明確な展望は存在しない[18]。

このような調査に乗り出したのは，先の選挙の結果であった。勝利したTory政府に対し反穀物法同盟は何のためらいもなく反対することのできる自由な立場になり，急進派やChartistsと提携し，彼らの支持を取りつけようとしたのである。

たとえば，Worcesterでは1842年2月に，自由貿易主義者と急進派とChartistsの結合による，集会が「全国の困窮状況を調査する」という目的で開かれた。そして熟練工や職工と共に，困窮し，不満をもった貧民たちの群集が大ホール一杯に集まったのである。そしてこの集会で地元の反穀物法派の候補者が新しいTory政府を攻撃し，次のように聴衆の支持を求めた。

Tory政府は全国民からの搾取という大目的を達成するために，商人と農民を，雇用者と被雇用者である労働者を，すなわち常に人間と人間とを闘わせてきた。さらに彼らは我国の困窮を治す方法は移民であると主張している[19]。

しかしこの試みはChartistsとの統合という当初の目的を満足させるものではなかった。集会では穀物法反対の決議と同時に，人民憲章の6項目に反対する決議も圧倒的多数で採決してしまったのである。

2．1842年 Rochdale の労働者に対する演説

この頃より反穀物法同盟とChartismとが再び理論的，武力的闘争を激しく繰返したのである。もちろんChartists運動は1836年頃よりすでに勃興し，1839年にも激しい対立を見ている。

Chartismの本質からみても当然の現象だったのである。両者の間には階級的対立意識が存在したのである。

反穀物法同盟は中産階級の運動であり，生活費の低減を求め，ひいては生

産費の低減を実現するために低物価を希望するものであるのに対し，Chartists は労働者階級の運動であり，10時間労働法の成立を希望し，1834年の新救貧法に反対し，より良い労働条件，生活条件を求めて，社会改革を実現せんとするものであり，次のように主張している。

「穀物法の撤廃は悪くはないが，人民憲章が獲得されれば穀物法等の悪法は撤廃される。自由貿易論者を助けるために人民憲章の運動を放棄しても，彼らは人民憲章を獲得するために Chartists を援助しないであろう。彼らは穀物法の撤廃を要求するが，これは我々のためではなく，彼等自身のためにである。安い穀物を，と言っているが，これは低い賃金，を意味するものだ。[20]」

Chartists は彼らの最大の目的である普通選挙運動，工場法運動，救貧法改正問題に対する関心が，同盟の活動により薄れることを大いに懸念したのである。

ここに双方の対立基盤がある。それは雇用者と被雇用者の間に存在した敵意を表現したもので，対立の多くは教義・教条のうえの問題ではなかった。経済的・政治的論争は双方の日常生活の中での深刻な対立から生じたものであった。

議会においては，Peel 保守党政府は穀物法を改正し，新しい Sliding Scale を登場させた。Cobden は必死に最後までこれに反駁したのであるが下院を通過してしまった。上院においては，地主階級を裏切るものとして保守的農業階級から反対を受けたが，ついに成立したのであった。

客観的にこの新穀物法を見た場合，関税を引下げたものであるので，一歩自由貿易の方向に前進したものである。

一方議席をもたない Bright は院外で不況化における反穀物法運動を積極的に推進させていた。

1842年になっても不況は継続し，困窮は全般的なものへと広がっていった。春には，工業地帯での窮状について，政府の注意を喚起するための政治的キャンペーンがあらためてなされていた。改革を要求した同盟の請願と Chartists の請願が議会に提出されたが，そっけない対応しか示されず，効果は見られなかった。困窮が最も激しかったのは，イギリス経済の基幹産業である綿織物工業においてであり，その結果ストライキが頻発した。すなわち，この時期のストライキにおいて，Chirtists は Lancashire, Yorkshire,

Cheshireの大都市において労働者に大きな影響を与えていた。彼らの運動と労働組合の活動との間には密接な相互関係が存在していたのであった。ストライキはChirtistsにとって賃金の上昇問題ばかりでなく，むしろ人民憲章の要求であった。

そして8月に入って事態は深刻化した。それはManchester周辺で始まった綿織物業労働者のストライキであり，その指導者はChartistsであり，ストライキ労働者の集会で人民憲章の支持が決議されたのであった。

8月8日，Stalybridge（Manchesterの東）の工場労働者は賃金引き下げに反対してストライキに入った。ストライキは周辺の町々に広がった。Ashton-under-Lyne（Manchesterの北東），Dukinfield（Manchesterの東南），を合せて23,000人が参加。そしてHyde（Manchesterの東南）の織工9,150人が午前中には加わり，午後にはOldham（Manchesterの北東）の織工の大部分がこれにならった。労働者は大挙して，Oldham，Ashton，Manchesterへと行進し，途中各工場の作業中の労働者を勧誘し，また工場の蒸気機関のボイラーの栓を抜いてまわり，ボイラーを空にすることにより操業を妨害した。いわゆる「Plug Plot（栓抜暴動）[21]」であった。2・3日のうちに5万人がManchesterでストライキに入った[22]。

このストライキの波は数日後には南Lancashire全域に，さらにWest Riding，Staffordshireの坑夫の他，midland地方にも拡まり，ゼネラルストライキの様相を呈し始めた。

もちろん，Rochdaleにも拡大した。Ashtonの集会に参加した労働者は8月11日Rochdaleに向け出発した。旗をもった人々が先導役をつとめ，行進者の頭上には棒にさしたパンがみられ，一緒に行けば，必ず何か食べ物が手に入る，と叫んだのであった。更にOldamからの一群と，Shaw（Rochdaleの南）からの一群が列に加わった。11時頃，Brightの工場に到着した。彼らはボイラーから水を抜き去り，大集会を開いた。Brightはその模様を次のように報告している。

6千人から8千人がいて，彼らは賛美歌や，Chartists賛歌を歌っていた。演説者の言葉は激しくなく，単に1840年の水準の賃金と，10時間労働を要求した[23]。

そして彼の印象によれば，扇動者はChartistsで，彼らが演説の中で行った賃金の上昇要求よりも，他の目的を持っていた。人民憲章の要求なのであ

る。

Brightは8月17日に彼らを前に演説した。これがかの〝Address to the working men of Rochdale″である。

この演説の構成は主として次のような問題から成っている。

1．ストライキの問題点
2．賃金問題
3．人民憲章獲得の困難性
4．中産階級における政治力の欠除
5．Chartists 指導者の批判

彼は演説の冒頭において，1．「ストライキの問題点」を，労働者の現状とストライキへの経過過程を分析した後に次のように的確に指摘している。

「諸君は苦悩している。長いこと苦悩を受けてきた。諸君の賃金は長年にわたり引き下げられてきた。そして諸君の境遇は徐々にしかも着実に悪化している。諸君の苦悩が不平を生み出しているのは当然のことである。そして諸君は，いかなる計画でも援助の希望を与えてくれるものには熱心に頼った。

Ashton や Oldham の同胞労働者は賃金の上昇を求めてストライキに突入した。彼らはこの町になだれ込んで来た。そしてストライキを諸君に強要した。疑いもなく一部の諸君は望んでいたが，諸君の多くはストライキへの参加は好まなかった。彼らは Bacup や Todmorden (Rochdale 近郊の北の村)の人々を，彼らが諸君をもてなしたようにもてなすことを主張した。彼らは諸君に対し勇気が無いと言い，そして諸君のために彼らが行動したのと同様に，諸君が他の人々のために活動することを拒否するならば，同胞労働者が持っている諸君に対する良い評判に諸君はふさわしくないであろう，と言った。諸君は侵略勢力となった。諸君は Bacup や Todmorden の平和な村に行き，同胞の労働者に仕事を止めるよう強要した。彼らの妻や子供に与える影響を諸君は考えなかった。諸君は，全ての正義と自由の原則に絶えず反対し，彼らのパンを奪ってしまった。1840年に賃金は上昇し，1日10時間労働は諸君が主張した要求であった。しかしこの地域でのストライキが強要された時，これらの要求は断念された。そして人民憲章が立法化されるまで労働拒否を主張した。[20]」

不況の中での強要によるストライキ参加であることを容認し，彼らの意志を転換させる余地を残すという温情を発揮したものである。しかしながら，ストライキに参加することは彼らの最大の目的である人民憲章の獲得を断念するものであり，かつ，賃金問題・労働条件問題の解決を放棄するものであることを厳しく指摘した。

そして次に2.「賃金問題」に及んでいる。

「諸君の多くは議会条例も，又多くの条例においても，賃金を高く維持することはできないことを十分知っている。諸君は貿易が長いこと悪く，そのために賃金は上昇できないことを知っている。もし諸君が賃金の上昇を強要する決心をしているのならば，雇用主に雇用を強要することはできない。貿易は利益を伴わねばならない。さもなければ長くは継続されない。賃金の上昇は今や利益を破壊するだろう。炭坑夫やキャリコ・プリンターの中に有力な実例がある。炭坑夫の賃金は多くの他の職業の賃金ほど低くはない。しかし彼らは苦しんでいる。なぜなら彼らは週のうち2・3日しか雇用されていない。キャリコ・プリンターの賃金は2・30年間に1度しか減少していない。彼らも現在週2・3日の仕事しかもっていない。他の労働者と同様少ない賃金である。もし彼らが賃金を2倍にするため団結しても，規則的な雇用の増大が獲得できないならば，何も得ることはできないであろう。賃金を上昇させる諸君の試みは成功しない。そのような試みは最終的には常に失敗し，家族は破産するに違いない。

この時期に労働時間を減少させることは同様に不可能なことである。実際にはそれは賃金の上昇であり，失敗するに違いない。労働に対する大きな需要なしに賃金の上昇はない。そして労働者が不足するまでは諸君が労働時間短縮を強要することはできない。[25]」

Chartists が，労働時間が減少された多くの例を引用して，その結果は全て賃金の上昇を見ている，と主張していることに対する Bright の主張であり，彼は労働時間と賃金の関係を否定はしていないが，その前提として海外貿易の発展を強調しているのである。貿易の発展を阻害する要因を除去し，安い市場で購入し，高い市場で販売し，可能な限り生活を安楽にし，不必要労働を避け，労働を軽減することが労働時間を短縮する。現在の貿易制度こそが労働の交換価値を人為的に減少させている。したがって穀物法は廃止されねばならない，という論法である。貿易が不振の現状では労働の機会は与えら

れないし，賃金は引上げられない。賃金を引上げれば利益が減少するからであり，賃金引上げにつながる労働時間の短縮を否定したのである。さらに演説の終盤において次のように補足している。

「穀物法の支持を諸君に訴える人々は諸君の敵である。穀物法の廃止を急ぐ人々は諸君に苦悩を与える期間を短くする。あの無慈悲な法令が存在する間は諸君の賃金は下落する。それが廃止される時，賃金は上昇する。たとえイギリス中の雇用者と労働者が賃金を下落させないとひざまづいて誓ったとしても，穀物法が続く限り賃金は確実に下落するだろう。もし穀物法が廃止されないなら，現在の賃金相場に諸君の賃金を継続することができる力は地球上に存在しない。[26]」

次に3．「人民憲章獲得の困難性」について次のように論じている。

「諸君の演説者や指導者は諸君に対し，賃金問題を断念し，人民憲章の主張を勧める。自然の法則は人民憲章の獲得に対し，賃金の強制的上昇に対し彼らが反対するような，障害は起こさない。しかし憲章の獲得は今や，力で賃金を上昇させるのと同じ位，不可能である。[27]」

Chartists は1838年に「人民憲章」を宣言して以来その実現方法を討議し，議会請願を中心として推進することを決定していたが，議会が請願を拒否する場合の手段として，労働組合と密接に連絡をとって，ゼネラル・ストライキに訴えることを討議していたのである。かつて彼らの請願書が議会に送られるとすぐに，Birmingham を中心にした暴動を計画したが弾圧を受け指導者の逮捕を見たことがあった。

今回の Chartists 運動に於いても，反穀物法同盟は自分自身のために「安い穀物」を要求しているのであり，これは「低賃金」の要因となる。彼らのゴマかしに耳を貸してはならない。諸君の人民憲章の獲得に固守していなさい。諸君にとって選挙権がなければ諸君は完全な奴隷である，というはげましの言葉が基盤になっている。

Rochdale のストライキの集会で Chartistsは，

「人民憲章なしでは諸君は公正な一日の労働に対する公正な1日分の賃金を獲得することはできないだろう。[28]」

と，労働者に対し演説している。これを受けての Bright の人民憲章獲得の可能性の否定であった。

次に Bright は，第4の，「中産階級における政治力の欠除」を述べ，労働

者の忍耐を期待したが問題点のある演説部分である。次のようである。

「貴族社会は力強く，堅い信念をもっている。だが残念ながら中産階級はいまだ全国民に対し，政治力を拡大する安全性を見きわめるに十分な知識を有していない。労働者階級は彼ら自身でそれ（政治力）を得ることはできない。腕力を諸君は賢しこくも受け入れない。それは不道徳であり，そして諸君は武器を持っていないし，また組織もない。道徳の力は有権者を通じてのみ発揮しうるが，いまだ確信されていない。人民憲章の原則はいづれうちたてられるだろう。しかしその日が来るには，何年も，何か月も要するかもしれない。その日が来るまで諸君は怠惰であってはならない。諸君の生活の唯一の手段は諸君自身の労働の産物からなる。残念ながら諸君には妻子がいる。誰もが飢えている。そして諸君は生きねばならない。そしてそのためには働かねばならない。[29]」

と，いうものであった。この部分は自らの問題点を明らかにし，責任を労働者に転稼していることは明白である。同盟に対する支援を期待すると同時に，職場に復帰し，生産労働に邁進することを奨励したものであるが，消極的すぎた。労働者の目標である人民憲章の獲得の困難性は彼らの組織力・政治力のなさに基因し，遠い将来であり，それまで労働をして待てという労働の有効性を訴える論法では労働者の合意・支持を得ることは困難であろう。

そして Chartists 指導者の批判をした後で，ストライキに走った彼らの事情を好意的に理解し，彼らに対し責任を追求すること無く，温情的に仕事への復帰を呼びかけた。まさしく Bright の宗教的思想により育成された博愛主義の表れであり，問題の平和的解決を常に志向している表れである。更に続けている。

「我が町の同胞諸君，諸君は今週は熱狂的であった。諸君の行動は，否定しなかったごとく平和を好むものであった。そして私は諸君に関する知識をもち，諸君を熟知しているので，諸君に期待した。我々は誤りを犯しやすい。諸君は誤ちを犯した。しかしそれは運命を決めるものではない。それは取戻せるだろう。私は諸君が知識人であると信じている。でなければ演説をしない。知識人としての諸君と何もせずにいることはできず，さりとて力で賃金を上昇させることは永久にできない。今すぐ憲章を得ることはできない。それでは諸君は何をすべきか。諸君の仕事に戻りなさい。誤りを認めることは誤りの中で主張することより一層気貴いものである。そして誤りを捨てれば，

真実に一層近づくのである。仕事を取戻す際に諸君は政治を改良する希望を捨ててはいけない。あきらめは現在の運動以上の嘆きとなる。希望をより幸福な日が来るまで大切にして下さい。そして諸君と諸君の子供達は幸せな日を楽しむであろう。[30]」

次に，5．「Chartists 指導者の批判」をしている。

「諸君の雄弁家達は声を大にして，諸君の数や力について説明する。そしてもし諸君が変らない信念をもっているならば，驚くような結果を約束する。彼らは諸君をあざむく。恐らく自分自身をもあざむいているであろう。彼らのある者はごまかしでどうにか生きており，ある者は彼らのリーダーシップの栄光に満足している。彼らは諸君に大いにおべっかを使い，雇用者をひどく中傷している。諸君の政治的自由を苦心して獲得しようとしているふりをしている。彼らは政治的自由が選挙団体としての中産階級を通じてのみ得られることを知っている。過去4年間，彼らは諸君の眼前に，現在では得ることのできない目的を掲げた。そしてそれを探し求めることを主張した。続いて実際の目的を妨害するために絶えず活動した。彼らは実体を悪く言い，名ばかりのものを絶賛した。彼らは貴族社会の強奪の打倒のために1人で諸君を助けるであろうし，また助けることができる人々に対し，諸君を怒らせることに絶えず努力した。彼らは嫌疑と不和の増大に成功し，そして不和が彼らの多くを生きさせた。彼らは諸君の週給7～8シリングを永続させるために最善を尽くした。そしてその結果彼らはその3～4倍の収入を享受した。[31]」

Chartists の指導者は Manchester に到着した時，このストライキの拡大のあとには全般的な蜂起が続くであろうし，続くべきである，と確信していた。ゆえに彼らはさらにストライキを拡大しなければならなかったのである。事実この間にストライキは Lancashire から Pennin 山脈を横切って Yorkshire へと拡大していた。各地において新しい支持者が加わり，工場の操業は停止していったのであった。一方 Bright はこのような状況を鎮圧するために，ストライキの責任をその指導者に与え，彼の欲望を暴露したのであり，すでに明らかにした「職場への復帰」を次の要求としたのである。

最後に Bright は，自由貿易が労働者の苦悩を除去するとし，貿易発展のために飢饉の撲滅を実現しなければならず，その味方こそが同盟であると演説した。すなわち，

「自由への一歩は貿易の自由であり，工業の自由でなければならない。我々は不公平な飢饉を終えさせねばならない。それが貿易を破壊し，諸君の労働，賃金，安楽そして独立の要求を破壊している。貴族階級は反穀物法同盟を彼らの最大の敵と考えている。イギリスの無慈悲な貴族社会の最大の敵である同盟は必然的に諸君にとって最も頼りになる味方である。[32]」

以上のごとく Bright の演説は，その中に問題点もあったが，効果的であり，彼の助言は機敏に続けられた。いくつかの地域で暴動が生じたが，Chartists 運動は当初予想されたような結果を招かずに静まった。

反穀物法同盟は，穀物法の廃止によって国内食料価格の下落がもたらされ，これによって賃金を引き上げることなく窮迫を救済し，さらにイギリス製造業品の貿易の新たな可能性を開き，それによって国内全般の繁栄を促進させ，労働者の賃金増大を図ることが可能となる，という論理を Chartists に理解させることが目的であった。安いパンのために見事な演説をしたということは Bright の同盟の運動に対する主なる貢献であった。彼が演じた重要な役割の1つは，士気高揚という役割であった。穀物法廃止という正義感に燃えて，運動は勝利しなければという態度で引き受けた。勝利の時はすぐに来るだろうと繰返し Cobden に話していた。並みはずれたイギリスの人口発展，近代的交通機関，同盟の激しい運動がそう思わせたのであった。

3.「栓抜き暴動（Plug Plot)」について

1842年はストライキの年であり，不況は全般的なもので，困窮の度合いがもっとも頂点に達したのは，イギリスにおいて基幹産業の位置を占めていた Lancashire の綿織物製造業においてであった。しかもこのストライキは Feargus O'Connor を指導者として，人民憲章と賃金の引き上げを目的とした Chartists 運動であった。反穀物法同盟は，穀物法廃止を勝ち取るためには大衆運動を指導し，味方に引き入れる必要があったのである。ここに Bright の力が試されたのであった。

ストライキは Manchseter を中心とする近郊諸都市に広がった。ストライキに参加した労働者は8月11日，Rochdale を行進して午前11時頃 Bright の工場に到着し，彼らは工場の動力源となっている蒸気機関のボイラーの水栓を抜き去りボイラーを空にし，生産を停止させるのであった。このようにこの時のストライキは，水栓を抜き回るという形式の暴動に発展し，「栓抜き暴

動」と呼ばれたのであった。

しかしながらこの「栓抜き暴動」は，わが国においては「点火栓抜き暴動[34]」と呼ばれ，1842年のストライキの代名詞となっている。

点火栓とは，原動機としての熱機関である内燃機関においてピストンの上下運動に必要なシリンダー内で燃焼をおこなうために混合気に点火をおこなうものである。

普通の型の内燃機関には，蒸気機関と同じようにシリンダーとピストンとがあってクランクにつながれており，高圧の蒸気を送り込むかわりに，ピストンの動きにつれてシリンダーの一方の側に空気と燃料とを吸いこみ，シリンダーのなかで燃焼（爆発）させ，高圧のガスを作ってピストンを動かすのである[35]。この燃焼（爆発）の際に点火栓（スパークプラグ）で火花を飛ばし点火させるのである。

これに対し蒸気機関は，蒸気の持っている熱エネルギーを外部のボイラーで作り，その高圧蒸気を機関のシリンダーに導入し，ピストンを上下させ，回転運動に変える外然機関の原動機である。ピストンを動かす熱エネルギーを機関の外部ですでに作ってしまうので，点火栓は不必要なのである。

まさしくこの蒸気機関が，1842年のストライキ時代に Manchester を中心とする Lancashire 地方の綿織物製造業に一般的に普及していたのである。

しかし蒸気機関は，ボイラーの装置が大規模で，その大きさが全装置の半分以上を占め，しかも効率も悪く，さらにボイラーには爆発事故の危険性があり，労働者にとって恐怖の的であったので，ボイラーを必要としない内燃機関の発明が望まれていたのである。

もしこのような内燃機関が発明されれば蒸気機関よりもはるかに小さいものとなり，はるかにたやすく運転に移ることができるであろう。すなわち，外燃機関である蒸気機関の場合には，水を火にかけて沸かすことが時間のかかる過程であるのに対して，内燃機関では可燃性蒸気と空気の混合物に火花を接触させるだけで爆発を起こすことができるのである[36]。

この内燃機関が発明され，初めて実用化に成功したのはドイツ人の Otto であり，1876年[37]のことである。したがって，点火栓で作動する内燃機関は1842年には存在しないのであって，その年の騒動は「点火栓抜き暴動」ではなく，蒸気機関の単なる水栓を抜くことによりボイラーを空にし，工場生産を停止させる「栓抜き暴動」である。

またこのことは次のような記述からも明らかである。

……the plugs had been removed from the boilers, hence the 'Plug Plot'[38].

……enforcing closure by raking out boiler fires and drawing boiler plugs. (hence the name 'Plug Plot' given to these diturbances.)[39]

……the rioters 'would proceed to draw the water plugs of the steam boilers, and thus, without personal violence, they would put an end to the working of the mills'. The tactic gave the campaign its name, 'the Plug Plot'[40].

……plug-drawing (emptying the boilers, and so stopping the mills)[41].

おわりに

かくして，自由貿易主義者として Bright は Chartists と同盟関係というもう一つの活動範囲で重要な貢献をした。両者の関係は最も敵対するものであったが，Bright の精力的努力がなかったなら，一層悪化していたであろう。

1840年代の初期において，完全な Chartists の数は少なかったが，ほとんど全ての労働者が Chartists の支持者であると考えられていた。Bright は反穀物法同盟が民衆運動のリーダーであるためには，彼ら潜在的 Chartists を味方に引き入れねばと考えていた。これは難問であるが，重要なことであった。特に Chartists が，同盟の集会を妨害することを楽しむようになっていたのでなおさらであった。

そして Chartists との討論の中で，Bright は穀物法廃止は男性選挙権より重要性があると主張した。大土地所有者の圧制と利己主義が飢饉と選挙有権者の限定を作り出した。したがってそれらを倒すために第1になすべきことは穀物法を除去することで選挙法改革はその次である，と説明した。すなわち，穀物法の廃止は国内の食料価格を下落させ，それによって賃金の増加を必要とすることなく困窮を救済し，そしてまたイギリス産の商品の新たな海外市場を開拓し，貿易を促進し，それによって全般的な繁栄を増進し，労働者である民衆はその収入を増加させることができるであろう，と考えたのである。

1842年のこの時期に Cobden は Bright に議会入りを進めた。傑出的才能をもった演説者は自由貿易運動にとって計り知れないものがあった。そして1年後の1843年7月，Durham 市の下院議員に当選した。

かくして Bright は彼の穀物法観に従い，その後は Cobden と共に議会内から反穀物法運動を展開し，穀物法廃止に向けて邁進するのである。

（注）

(1) Thomas Tooke, *A History of Prices, and of the State of the Circulation,* vol.4., Longman, London, 1848, p.411 & p.413.

(2) 1838年から39年の不況については，拙稿「1839年における反穀物法運動」経営論集，第38号，1992年，10－14頁参照のこと。

(3) Thomas Tooke, *op.cit.*, p.435.

(4) すなわち，反穀物法運動を，1838年9月に反穀物法協会が成立した時期を第1期とし，反穀物法同盟に移行を推進した1839年2月以降を第2期とし，そして第3期を，もっとも深刻化した不況期において本格的活動を実践した1841年・42年とし，この第3期における John Bright の活動に焦点をあててみる。

(5) Archibald Prentice, *History of the Anti-Corn-Low League,* vol.1, Frank Cass & Co. Ltd., London, 1968, p.73.

(6) Cobden の反穀物法協会結成以前の活動の1例として，次のことが指摘できる。1837年秋 British Association の会議が Liverpool で開催され，Porter をはじめとする経済学者も討論に参加した。Richard Cobden も参加しており，会合の後，彼の友人である Henry Ashworth に次のように語った。「我々は何をなすかお教えしましょう。我々は Manchester 商業会議所に穀物法廃止運動を進めるにあったて，一役買ってもらうのです。」1838年2月 Cobden は運動を活発に進めるために Manchester 商業会議所の説得を試みた。会議所はすでに穀物法に対し反対の異議を唱えていたが，しかしそれだけでもう一歩進んだ段階には進展していなかった。（拙稿「Sliding Scale 法から反穀物法協会設立への過程」経営論集，第20号，1982年，62－63頁。）

(7) Archibald Prentice, *op.cit.*, p.81.

(8) George M. Trevelyan, *The Life of John Bright,* Constable and Company Ltd., London, 1913, pp.30-31.

(9) George B. Smith, *The Life and Speeches of the Right Hon. John Bright, M.P.,* vol.1, Hodder and Stoughton, London, 1881, p.139.

(10) *Ibid.*, p.139.

(11) Francis Watt, *The Life and Opinions of the Right Hon. John Bright,* James Sangster & Company, London, p.22.

(12) C.A.Vince, *John Bright,* Blackie & Son, London, 1897, pp.14-15.

(13) *Ibid.,* p.9.

(14) 「世界大百科事典・6」平凡社，1971年，530-535頁。

(15) Keith Robbins, *John Bright,* Routledge & Keganpaul, London, 1979, p.31.

(16) George B. Smith, *op. cit.,* p.146.

(17) *Ibid.,* p.148.

(18) *Ibid.,* pp.148-149.

(19) Dorothy Thompson, *The Chartists, Popular Politics in the Industrial Revolution,* Wildwood House, England, 1984, p.273.

(20) Donald G. Barnes, *A History of the English Corn Laws from 1660-1846,* Angustns M Kelly, New York, 1961, p.249.

(21) 「Plug Plot」は「栓抜き暴動」であって，今日一般的になっている「点火栓抜き暴動」ではない。このことについては次項にて明らかにしたい。

(22) Keith Robbins, *op. cit.,* p.37.

(23) *Ibid.,* p.37.

(24) H.J.Leech, *The Public Letters of the Right Hon. John Bright, M.P.,* Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, London, 1885, pp.334-335.

(25) *Ibid.,* pp.335-336.

(26) *Ibid.,* p.339.

(27) *Ibid.,* p.336.

(28) Dorothy Thompson, *op. cit.,* p.288.

(29) H.J.Leech, *op. cit.,* pp.336-337.

(30) *Ibid.,* p.338.

(31) *Ibid.,* pp.337 338.

(32) *Ibid.,* pp.338-339.

(33) 『工場の蒸気機関の点火栓（plug）を抜いて廻った。この運動が「点火栓抜き暴動」(Plug Plot Riot) と呼ばれる理由である。』(古賀秀男著「チャーチスト運動の研究」ミネルヴァ書房，1975年，76頁。)

『紡績・紡織機の蒸気機関の点火線を引き抜く「点火栓引き抜き争議」に席捲された。』(熊谷次郎著「マンチェスター派経済思想史研究」日本経済評論社，1991年，29頁。)

(34) 「科学の辞典」岩波書店，1985年，318頁。

(35) 「科学と発見の年表」丸善株式会社，平成4年，249頁。

(36) 富塚清著「内燃機関の歴史」三栄書房，昭和57年，２頁。

(37) Keith Robbins, *op. cit.*, p.37.

(38) Wendy Hinde, *Richard Cobden, A Victorian Outsider,* Yale University Press, New Haven and London, 1987, p.110.

(39) Norman Longmate, *The Breadstealers,* St. Martins Press, New York, 1984, p.158.

(40) G.B.Smith, *op. cit.*, p.156.